



タイトル変わりました

人権感覚を育て、差別をなくすための第1歩として、「人と人とのコミュニケーションの大切さ」や「住民のちからをつなぐ」という意味を込めています。

人生、ファンブルでも、良しとするか

ーじんけん学習会参加者の心を垣間見てー

あるテレビ番組で、「喝ッ！喝ッ！喝ッ！プロの野球選手があんな追い方じゃ、ファンブルも当然！」納得した他のゲストも口を揃えて「大喝ッ！」、「まごまごしましたね」と番組司会者は苦笑しつつもボードに「喝」のカードを重ねた。

解説者が口にした、まごまごする、仕損じる、落球するの意をもつ「ファンブル」。外来語が氾濫する昨今の中、今や聞かれなくなって久しいこの言葉。遠い子どもの頃に熱中した神社境内がグラウンド代わりの三角ベースボール。「目を離さずしつかり捕らんか！ファンブルすんな！」。時の上級生が口にした叱咤激励の響きが再び蘇った。解説者の「喝ッ」の判定に私は、頬を緩めながらもファンブルの言葉になぜか心が揺さぶられるのを覚えたものだった。

というのも、旧国見町の一住民から予期せず教育委員会で人権・同和教育啓発に携わった。現に高齢化率40%あまりの超高齢社会の国見町が「高齢者をめぐる人権」をテーマにした「じんけん学習会」を開く。当日の係員、また参加者として各会場を回り、多くの意見や考え方に触

れる機会に恵まれたからであった。

とある会場でのこと。講師が本日の課題「親の介護は誰がする」の見解や学習手順を説明し終わった直後、参加者の数人がおもむろに手を挙げたのだった。

「在宅介護で最期を迎えたお義母さんのことなんですが……」

と女性。20名を超す参加者は女性の言葉に向けられ、やがて参加者は語り合わせて静かに頷いていた。参加者の反応に異様さを覚え、また会場の雰囲気、女性の語りに引き込まれた自分を今でも鮮明に回想するのである。

義母・嫁にとつても想定外であった在宅介護生活。想像を遥かに超える介護を積み重ねた日々の営み。長い年月の「コマ」を回想しつづ語りかける女性。何をして彼女が発言を求めたのか、看病を終えた解放感からなのか。まごつき仕損じたファンブルの連続、戸惑いの介護。やがて制約の多い日常生活から来るいら立ちやなおざりな介護に走ったという嫁。そんな彼女が最期まで義母を看取った支えは、何であったか。

ファンブルを繰り返しながらも献身的

な嫁の姿を受け止めた義母や家族。笑みまで添えたという義母、温かく見守る地域の人々の心を垣間見たのだった。ファンブルを批判し、完璧を求められるプロアスリートの世界と異なる地域社会で、人々が日々の営みを支え合う原点の一つが、彼女の一言一句に積み重なっていたのではなからうか。

重度の身障者ながら15年に及ぶ難病パーキンソン病と闘い、力尽きて旅立った連れ合いへの在宅介護を、私は振り返った。「人生、ファンブルでも、良しとするか」。自分自身が欠落していた心の一つを見出した気がしてならない。

教育委員会国見分室 泉谷



とある会場での学習会の様子(昨年)